

医療ツーリズムで心臓手術

カザフ人男性が退院

渋川・北関東循環器病院

渋川市北橘町下箱田の北関東循環器病院（南和友院長）に入院し、心臓外科手術を受けた中国在住のカザフスタン人、バックル・トゥルスンさん（51）が9日、同病院を退院した。バックルさんは6月中旬に在住する新疆ウイグル自治区から来日。同病院が国外に住む外国人を手術目的で受け入れたのは今回が初めてで、南院長は「同様の受け入れを今後も続けていきたい」と話している。

イスラム教対応の病院食

2012年春に心筋梗塞を発症し、現地で薬物治療を受けていたバックルさん。日本で治療方針を判断してもらおうと、カザフスタン人の医師らの人脈をたどり心臓外科の権威、南院長がいる同病院に入院した。6月20日に南院長が執刀する冠動脈バイパス外科手術を受け、体調も順調に回復。9日に退院することができた。

バックルさんは「現地の料理が少し恋しくなっただけで、不安なことはなかった」と入院生活を振り返る。しばらくは数カ月1度来日し、診察を受ける必要があるものの、帰国後すぐに

仕事に復帰する。遊牧民として家畜の世話をしており「200%治ることを信じて来日し、信じた通りになった。これからはさらに大きな仕事をしたい」と意欲を見せている。

今回、同病院は外国人の受け入れに際し、さまざまな工夫をした。バックルさんは英語を話さないため手術や治療の説明は通訳を介したが、看護師らが日常会話する場合には現地語と日本語が書かれた手作りの紙を使って意思疎通した。またイスラム教のバックルさんのために、豚肉を抜いた病院食を用意した。

同病院には現在、カザフスタンや中国から手術を希望する患者が他にもいるといい、南院長は「年間10人程度外国から患者を受け入れることができそう」と話す。外国人の患者を受け入れる「医療ツーリズム」の推進には環境整備や現場の教育などが欠かせないと指摘した上で「この病院の例を参考にしてほしい」と期待を寄せている。



民族衣装を贈り南院長に感謝の気持ちを伝えるカザフスタン人のバックルさん(左)